

新たな社会進化論の動向

—システム論的アプローチを中心として—

高 巖

目 次

- | | |
|------------------|------------------------|
| 序 | Ⅱ. 吉田民人の社会進化論 |
| Ⅰ. T. パーソンの社会進化論 | Ⅳ. K. E. ボールディングの社会進化論 |
| Ⅱ. N. ルーマンの社会進化論 | 結 び |

序

現代は、「情報革命」という言葉にも象徴されるように、歴史の大きな転換期にある。一般に、人類は、歴史上の大きな社会変動に直面する度、その変動を何とか説明しようとしてきた。この試みは、現代の社会変動に対しても為されつつあるようである。

ある社会科学上の理論が、ある特定の時代に大きな影響力を行使するためには、理論内容自体が、その時代の人の行動様式に、何らかの正当性を与え

得るものでなければならない。その意味で、理論は時代によって創り出されるという一面をもっているのである。

このことは、19世紀中葉から大きな影響力を行使した「社会ダーウィニズム」についても言えることである。C. ダーウィンは、『種の起原』を1859年に著し、進化の原理たる「自然選択説」と「生存闘争説」を唱えた¹⁾。ダーウィンのこの思想は、その後の「社会ダーウィニズム」の原型をつくることとなったが、その思想の社会への浸透は、まさに時代の要請によって為された感がある。

八杉竜一によれば「自然選択説はレッセ＝フェールの社会原理を基盤にうまれてきたものだから、その面で自由競争を原理としていた社会に歓迎されたのは当然で、そのさい経済的レッセ＝フェールの観念がまずさき²⁾にあって、それからもっとひろく社会の他の諸現象に適用されることになった」とされている。また「生存闘争説」に関しては、当時「個人間の生存競争はどんな社会でもみられていたから」、何の抵抗もなく社会に浸透していったとされている³⁾。

このようにして、社会ダーウィニズムは、社会に広く深く受け入れられていったのである。しかし、社会科学上の理論は「最初によく現実に妥当する理論であっても、そのようなすぐれた理論であればあるだけに、やがて必ず自らが妥当しなくなるような現実をつくり出す」がゆえに、理論自らの妥当性を失っていかざるを得ないものなのである。つまり、すぐれた理論ほど、ある時代に「歴史を推進する役割」を演じ、自らが妥当し得た社会を変容させ、その変容によって、自らの妥当性を失っていくものなのである⁴⁾。それゆえ、このような理論の妥当性の喪失は、当時、指導力をもっていた社会ダーウィニズムにも訪れたのである。

それは、現実社会との間に、次の二つの問題を生み出し、自らの妥当性を失っていったと言えよう。第一の問題は、第一次大戦の勃発と反進歩主義思想の形成である。生存競争の考え方は、個人間だけに止まらず、国家間にも適用され、結果的に、進化のための戦争までもが是認されてしまうことと

なった。しかし、戦争の結果は、進化とは言い難い悲惨な状況を現出し、シュペングラーの『西洋の没落』に象徴されるような反進歩主義思想の台頭を招いたのである。

第二の問題は、社会的弱者に対する差別意識の醸成、及びそれを背景とした階級形成という形で進行した。社会ダーウィニズムは、自然淘汰メカニズムの意義を認めるがゆえに、「優勝劣敗」や「弱肉強食」の思想をも認めることとなり、結果的に、貧民などの社会的弱者に対する救済を、進化にとって不必要なものとしてしまった⁵⁾。そのため、社会立法を説く改革論者や社会主義者との間に、思想的対立が生まれ、徐々にその説得力を失っていったのである。

このように、社会という生きた現実が変容することによって、社会ダーウィニズムは、理論的な妥当性を失っていったのである。また、現実の変化に加え、新たな理論の台頭が、社会ダーウィニズムの影響力を弱めていったことも事実である。たとえば、心理学の台頭は、生物学的アナロジーに準拠した古典的な社会進化論の理論的根拠を揺るがしたし、また、文化人類学は、「文化の伝播」によって社会の変容を説明する立場を示し、単線的な社会進化の考え方を否定していったのである⁶⁾。

このような経過をへて、社会ダーウィニズムは、20世紀前半までに、その影響力をほとんど失い、社会科学の表舞台から退いていったのである。しかし、この事実は、社会進化という考え方が、永遠に否定されたということではない。それは、20世紀前半という特定の時代に否定されたというだけのことである。なぜなら、時代が古い理論を時代遅れのものとし、また時代がその古い理論を止揚させ、新たな理論を自らの要請にもとづいて創り出す、という知識社会学上の真理があるからである。事実、転換期にある現代という時代は、新たな社会進化論を生み出しつつあるのである。

そこで、本稿では、最近の社会進化論、なかでも特に、システム論的思考にもとづいた理論を四つ取り上げ、その内容を整理していくことにしたい。その四つとは、T. パーソンズ、N. ルーマン、吉田民人、K. E. ボールディ

ングの理論である。

第一に、パーソンズ理論を取り上げた理由は、パーソンズが、社会学の主要な分析手法の一つである「構造—機能分析」を提唱し、社会学理論に大きな影響を与え、しかも彼自身、その手法をもって、社会進化の問題に取り組んでいるからである。その理論の特徴は、社会進化における「文化的要因」の重要性を強調するところにある。

第二に、ルーマン理論を扱う理由は、それが現象学的な観点から構成され、「構造—機能分析」を超えようとするものだからである。その特徴は、情報論における「最小多様度の法則」を応用し、社会システムの「意味連関」の重要性を認めているところにある。

第三に、吉田理論を取り上げた理由は、これが、最も自覚的に情報論的視座をとり入れて、社会の変動過程を分析しているからである。この理論の特徴は、社会システムを「情報—資源処理システム」として捉え、社会構造の変動—正・負の社会進化—を、構造を制御している文化的な「情報」の変動としているところにある。

最後に、ポールドィング理論を考察する理由は、それが独自の科学論を背景として組み立てられ、しかもその内容が他と比べ、かなり具体的だからである。理論の特徴は、社会進化における「精神圏」の役割の重要性を強調しているところにある。

この他にも、参考とすべきシステム論的な社会進化論は数多く存在するであろう。しかし、本稿では、これら四つの理論を整理することによって、最近の進化論の動向の一端をうかがい、あわせて、現代という時代が求めている社会進化論の特徴を見ていくことにしたい。

注

1) ダーウィンにおいては、「生存闘争」(struggle for existence) という概念が用いられたのであって、「生存競争」(competition for existence) という概念ではない。

- 2) 八杉竜一『進化論の歴史』岩波書店、1969年、161頁。
- 3) 同上書、161頁、118~120頁。
- 4) 難波田春夫『国家と経済』早稲田大学出版部、1982年、48頁。
- 5) 富永健一「産業主義と人間社会」(高橋・富永・佐藤編『社会心理学の形成』所収)、培風館、1965、88~127頁。
- 6) 友枝敏雄「社会進化論」(安田・塩原・富永・吉田編『社会変動』所収)、東洋経済新報社、1981年、141頁。

I. T. パーソンズの世界進化論

パーソンズ理論の大きな特徴は、「文化的要因」もしくは「文化パターン」の重要性を強調する点にある。文化とは、生物進化における遺伝子に相当するものであり、社会システムは、それによって構造維持もしくは構造変動を可能にするというのが、この理論の基本的な考え方である。

パーソンズ理論の全体像を概観するにあたって、まず、彼の言う「社会進化」の内容から整理していくことにしたい。それは、次の四つの過程を伴う社会変動である。すなわち、機能分化、適応能力の上昇、再統合(包括)、価値の普遍化、という現象とともに進行する社会構造の変動である。

第一の「機能分化」とは、ある社会システムにおいて、「一つの構成組織あるいは一つの社会構造が、それぞれの特徴を異にし」、またこの社会システムに対する「機能上の意義を異にする二つ以上の構成組織あるいは構造に分裂すること」¹⁾である。

しかし、この機能分化という過程は、それだけでは、進化を捉える基準とはなり得ない。必ず、環境に対して、システムの「適応能力」が上昇しなければならないのである。この「適応能力の上昇」とは、より広い範囲にわた

って、物的資源や労働力などの諸資源が、「各社会構成組織の利用に供せられることになり、各組織の活動が、それ以前の組織がもっていたさまざまな制約のいくつかから解放されるに至るような過程²⁾」のことである。

第三の「再統合」とは、社会システムの拡大により、それまでシステムの内部になかった組織や機構を包括していく過程である。この過程が、進化を捉える一つの基準となる理由は、「機能分化と適応能力の上昇に伴って」社会システムの複雑さが高まり、必然的に「内部統合に関する問題」が、浮び上ってくるからである。つまり、たとえば、企業組織が家族組織から機能分化してくると、この両組織を制御する上位の組織は、「両者をともに当の社会の規範構造の中にはっきりと組み込まなければならない⁴⁾」という問題に直面するからである。

第四の「価値の普遍化」とは、社会システムを制御する規範や価値が、より一層一般化される過程である。いかなる行為も、それが展開される状況の多様性にかかわらず、常にその社会のもつ「一般的価値様式にその一々が照合され、それから指示を与えられるもの⁵⁾」である。それゆえ、社会システムの内部で構造づけられている「状況の組み合わせ」が複雑になるにつれ、「価値様式それ自体も、社会的安定を確保するために、より高次の普遍性・一般性をもって表現されるようにならねばならない⁶⁾」のである。

これら四つの過程が進行する時、社会システムは進化している、と解されるのである。

そして、パーソンズは、次に、これらの視角から人類史に光をあて、その歴史に社会進化の段階を描き出すのである。それは、「原始社会」「中間社会」「近代社会」という三つの段階である。ただし、このような進化段階の図式は、「連続的あるいは単線的過程」を示すものではない。それは、ただ「発展の大まかなレベルを区別」しただけであって、「各段階にみられるかなりの変異⁷⁾」を認めた図式なのである。

いずれにせよ、この進化段階の設定にあたって、「規範的構造のコード要素の重要な発展⁸⁾」が、パーソンズの中心的な着眼点となっている。すなわ

ち、原始社会から中間社会への転換は、「文化体系の部分である言語」の発展によって実現され、また中間社会から近代社会への転換は、「規範的秩序の制度化されたコード」、とりわけ「法体系」の発展によって実現された⁹⁾、と考えられているのである。

このようにして、彼は、社会進化における「文化的要素」の重要性を確認し、文化の社会システムに対する「サイバネティック・コントロール」の意義に着目していくのである¹⁰⁾。ただし、パーソンズは、文化的要因のみが社会変動・社会進化を実現すると極論しているのではない。すなわち、「単一要因説¹¹⁾」は事実と反するものと考えられているのである。

しかしまた、単一要因説を否定するからと言って、パーソンズは、諸要因間のハイアラキカルな関係までは否定しなかった。そのハイラーキーは、物理的要因から始まり、生物的、心理的、社会的、文化的要因へと高まっていくものである。彼はこのハイラーキーを、「必要条件」と「サイバネティック・コントロール」という異なった位相から捉え、「必要条件」に関しては「エネルギー」という指標をもって、また「コントロール」に関しては「情報」という指標をもって、要因のハイラーキーに意味を与えたのである。すなわち、ハイラーキーを登るにつれて、エネルギー度は減少し、情報度が増大するという意味を与えたのである¹²⁾。この二つの位相のうち、パーソンズは特に「サイバネティック・コントロールのハイラーキー」を方法論上重視し、「進化における基本的な革新」を、サイバネティックスのハイラーキーの低レベルにおける変容ではなく、高レベルの要因の変容に求めたのである。つまり、情報度の高い「文化的要因」に求めたのである¹³⁾。そのことは次の記述に最も克明に示されている。

「タイム・パースペクティブが長ければ長いほど、含まれた体系が広ければ広いほど、説明を必要としているのがパターン¹⁴⁾の維持か変動かということにはかかわらず、コントロール・ハイラーキーの低次の要因よりもむしろ高次の要因の重要性がますます増大するのである。」

パーソンズが、文化的要因の重要性を主張する立場は、社会システムにお

ける組織間交流の媒介手段という観点からも明示されている。その媒介手段とは、「影響力」「政治権力」「貨幣」「価値観委託」の四つである。これら媒介手段は、機能分化した組織間の相互交流を促進し、同時に、社会システム内の活動範囲や活動水準を広げ高め、社会進化に一役を担ってきたものである¹⁵⁾。たとえば「貨幣」は、「貸出や投資の過程を通じて、分業制度において相互交換を促進するのみならず、経済的生産の水準を高める重要な手段¹⁶⁾」となってきたのであり、社会進化に与えた意義は、実に大きなものである。

しかしながら、「相互交流の一般的な媒介手段の諸効果を上昇させる根本的な条件」は、ハイラーキーの高い「文化や価値体系」にそれを連絡させることである¹⁷⁾。その理由は、たとえば、価値の普遍化は、「宗教上のさまざまな発展が基礎」となっているし、またテクノロジーの制度化は、「経験的知識の展開」が先行しているからである。さらにまた、影響力によって促進される再統合も、「価値の普遍化が十分な水準に到達すること」が前提条件であるし、政治権力が効を奏するためには、影響力の作用を促進する「受け入れられた基盤」(a consensual base)が存在しなければならないからである¹⁸⁾。

以上のような主張から、パーソンズ理論の特徴を、社会進化における「文化的要因」の重視という点に求めることができるのではなかろうか。また、この要因のもつ「高い情報度」(High Information)、すなわち、高い制御能力を重視している点も、パーソンズ理論の見逃せない特徴であろう。

注

- 1) T. Parsons, *Politics and Social Structure*, The Free Press, New York, 1969, p. 55. [邦訳書『近代社会の体系』井門富二夫訳、至誠堂、1977年、41頁]
- 2) Ibid., p. 56. [同上]
- 3) Ibid. [同上書、42頁]
- 4) Ibid. [同上]

- 5) Ibid. [同上]
- 6) Ibid. [同上]
- 7) Ibid., p. 30 [邦訳書『社会類型—進化と比較』矢沢修次郎訳、至誠堂、1971年、38頁]
- 8) Ibid. [同上]
- 9) Ibid. [同上]
- 10) Ibid., pp. 32—33. [同上書、41～42頁]
- 11) 同上書、168頁。
- 12) 同上書、168～169頁。
- 13) 同上書、169頁。
- 14) 同上。
- 15) T. Parsons, *op. cit.*, p. 56 [前掲邦訳書『近代社会の体系』42頁]
- 16) Ibid. [同上]
- 17) Ibid., p. 57. [同上書、43頁]
- 18) Ibid. [同上]

II. N. ルーマンの社会進化論

ルーマンのシステム論的社会理論は、パーソンズの理論的支柱たる「構造—機能分析」と明確に対峙したものである。しかし、パーソンズが、社会進化の内容のひとつとした「適応能力の上昇」は、ルーマン理論の中核的概念である「複雑性縮減」と理論的にはほとんど同義であり、また、パーソンズが、社会進化の重要な要因を「文化的」なもの、すなわち、社会システムを外部環境と区別し、その構造を制御する「意味の体系」に求めた点も、ルーマン理論に通ずるものであろう。

ルーマンにとって、「進化」とは、システムの「環境の複雑性を縮減する

こと」である。ここに言う「システム」、なかでも特に、「社会システム」とは「意味適合的に連関している事実的行為から成り立っている¹⁾」ものである。そして、その「環境」(Umwelt)とは、システム境界の外部世界のことである。社会システムの境界とは、「意味境界としてのみ、いい換えれば情報を存立させる基礎原理としてのみ」、理解され得るもので、その内部では、「情報」が一定の「システム内的規則に従って処理」されているのである。²⁾ それゆえ、システム的环境とは、そのシステムを構成している「意味の連関」が、そこにまで及ばない「世界」のことなのである。

それでは、「環境の複雑性を縮減する」ということは、いったいどのようなことなのであろうか。「複雑性」という概念は、つねに「システムと世界³⁾の関係を表示」するもので、その「存在の状態を表示」するものではない。たとえば、世界という「環境」の複雑性(Weltkomplexität)が、システムのもっている環境対処能力を大きく越える時、システムは、自らの複雑性(Komplexität)を高めることによって、対処能力を増大していかなければならなくなる。つまり、世界との「関係」において、システム自身の複雑性を高めていかなければならなくなるのである。この「システム自身の複雑性の増大」こそ、「環境の複雑性縮減」ということなのである。

このように、「進化」という概念を規定すれば、社会システムの進化とは、環境のより高度な複雑性を捉えて、それを決定可能な行為前提にまで縮減していく「情報処理メカニズム」を組織していくことである。⁴⁾ そこで次に、社会システムが進化していく過程、システムが自らの情報処理能力を高め、システム自身の複雑性を増大させる過程、を整理していくことにしよう。

その進化過程は、「行動期待の一般化」とシステムの「分化」によって展開される。まず、「行動期待の一般化」とは、基本的に、他者に対する役割期待の制度化・構造化であり、この行動期待(予期)の「備蓄されたもの」が、「基本的な意味でのシステムの法」である。⁵⁾ 行動期待の一般化は、主に次の二つの方法によって、進められる。その方法とは、「歴史」と「組織

である。

「記憶された歴史」は、もっとも重要な、しかもひとつの不可欠な複雑性縮減の方法である。なぜなら「過ぎ去ったものは人間と社会システムの相互に関連しあう自己表出の歴史」として、いかなる場合でも、「期待を確証し、類型化し、これに合意を付与してきた」からである。それゆえ、「歴史」は、社会システムにとって、「貴重な方向づけの資産」なのである。⁶⁾ この「歴史」と同じく、「組織」もまた同様の機能を果たす。すなわち、「組織は、特定の期待の容認をひとつのシステムの成員性の条件とすることによって、期待の適合的一般化を行う⁷⁾」からである。

このような「歴史」と「組織」の働きにより、社会システムの複雑性は、ある段階にまで高められることとなる。しかし、それがある段階に達すると、「社会システムの有意味な構築」は、非常に困難な状態へと陥っていくのである。この困難は、特に、システム内の「行動期待」が多様性と可変性を帯びることによって生じるものである。この困難からの脱出は、「内部分化」によって実現される。⁸⁾ 「分化」とは、システムが、それぞれ独立の「システム特性」をもった部分へと分かれていくことである。ここに言う「システム特性」とは、「自己の境界を安定し、さらにその境界のなかである程度の自律性を備える」ことである。社会システムは、この「分化」によって「超安定性」(Ultrastabilität)を達成するのである。⁹⁾

社会システムの進化は、これら「行動期待の一般化」と「部分システムへの機能分化」という二つの現象を伴って展開されることとなるが、それらの現象の進展と共に、情報選択過程をも強化していくことになる。すなわち、社会システムの対面する環境が拡大し、環境の複雑性が高まってくると、システムは、出来るだけ早くしかも確実に情報を処理できるように、自らを高めていかなければならなくなるのである。このような情報処理における「選択強化」は、特に「過程を自分自身に適用すること」と「選択性の働きの伝達可能性を確保すること」とによって、実現可能なものとなる。¹⁰⁾

「過程を自分自身に適用する」ということは、フィードバック機構の導入に

より、「反省的な構造を保持することによって、自己の性能を高めること」¹¹⁾である。また、「選択性の働きの伝達可能性を確保する」ということは、「伝達メディア」が枝分かれしていくことである。社会システムにおける選択は、間主観的に進められるし、また一度縮減されてしまった情報は、縮減されたままで伝達されなければならないがゆえに、伝達メディアの発達¹²⁾が求められることになるのである。枝分かれするメディアのなかでも、ルーマンは、特に「真理」と「権力」と「愛」と「貨幣」を最も重要なものと見做している。¹³⁾

以上のような社会システム理論を基礎として、ルーマンは、人類史における進化段階を設定していくのである。それは、進化にとって不可欠となるメカニズム概念の提示から始まる。その概念とは、「変異メカニズム」「選択メカニズム」「安定化メカニズム」の三つである。

「変異メカニズム」とは、「可能性の剰余という意味でのヴァリエーションを生み出すメカニズム」であり、「選択メカニズム」とは、「有用な可能性を選択し、有用ならざる可能性を排除するメカニズム」である。また最後の「安定化メカニズム」とは、「選択領域の高度の複雑性と不確実性が続くにもかかわらず、選択された可能性を維持し安定化させるメカニズム」のことである。¹⁴⁾これらのメカニズムは、「生物的領域」「意味的領域」を問わず、複雑な諸システムすべてに見られるものである。¹⁵⁾

彼によれば、「進化の速度」は、これらのメカニズムが分化していくのに応じて増大する、という。また、「時間地平における過去と未来の区分」すなわち、進化段階の区分は、ある時点から見て将来の社会が実現するであろう可能性が、その時点において前奏されていたか否かによって決まってくる、とされている。¹⁶⁾この前提をもって、ルーマンは、「メカニズム間の区別と分離という事象を、社会文化的進化の境界線」としたのである。¹⁷⁾そして、この境界線が、人類史を、「原始社会」「高文化社会」「近代社会」の三つに分割していくのである。

まず、「原始社会」とは「変異と選択のメカニズムが充分に分離されてい

ない社会」である。そこでは、主に「言語」が二つのメカニズムを同時に果していた。¹⁸⁾しかし、この両メカニズムの未分化問題は、「都市国家の形成や文字の発達を伴う社会」の出現によって解消された。その社会が、「高文化社会」である。¹⁹⁾しかしまた、この「高文化社会」も、メカニズム間の未分化問題を内蔵していた。それは、「原始社会」が、本来持っていた問題で、「高文化社会」は、それをそのまま受け継いでしまったのである。それは、選択と安定化メカニズムとの間の未分化問題であった。そのため、「高文化社会」では、選択の基準が「究極的に不変の道徳的・宗教的・宇宙的な価値」に置かれることとなり、選択の目指すところは、結果において安定化の実現ということになっていったのである。²⁰⁾

これらメカニズム間の未分化問題は、近代ヨーロッパの市民社会への発展において、初めて駆逐されることとなった。つまり、ここに至って、政治、経済、科学、家庭、宗教などが明確に分化していったのである。²¹⁾そしてこの機能分化により、「以前には、不可能であったほどの連続的な構造変動が起こり、その変動の中から、新たな社会が形成されるようになった」のである。²²⁾

以上のようにして、ルーマンは、社会の進化段階を抽象的な次元で図式化した²³⁾が、その図式の目的は、社会システムの将来予測ではなかった。むしろ、それは「単純な因果的過程」に従って構想された「古典的な進化論」を否定するところに力点を置いたものだったのである。²⁴⁾それゆえ、彼は、「進化理論の認識関心」は、まず、「進化の諸メカニズムの分化のもつ条件と帰結との定式化」にある、と述べているのである。

いずれにせよ、進化段階の設定により、ルーマンは、社会システムの複雑性縮減のプロセスを、人類史との対比において描き出したのである。パーソンズとの関連で、「複雑性縮減」という概念を捉え直すなら、それは、明らかに環境に対する社会システムの「適応能力の上昇」であり、しかも二義的には「機能分化」であり、「再統合」「価値の普遍化」なのである。また、複雑性縮減を推進する社会システムの「意味連関」も、情報度の高い「文化的要因」と解することができるのである。さらに、人類史における進化段階

の区分も、パーソンズのものとはほとんど同一と解すことができよう。

注

- 1) N. Luhmann "Funktionale Methode und Systemtheorie", Soziologische Aufklärung, Westdeutscher Verlag GmbH, Opladen, 1970, S. 42. [邦訳書『法と社会システム』土方昭監訳、新泉社、1983年、43頁]
- 2) N. Luhmann "Soziologie als Theorie sozialer Systeme", Soziologische Aufklärung, Westdeutscher Verlag GmbH, Opladen, 1970, S. 117. [同上書、136頁]
- 3) Ibid., S. 115. [同上書、131~132頁]
- 4) N. Luhmann, Rechtssoziologie, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1972, S. 133. [邦訳書『法社会学』村上・六本共訳、岩波書店、1977年、150頁]
- 5) N. Luhmann, "Soziologie als Theorie sozialer Systeme," S. 122 [前掲邦訳書『法と社会システム』148頁]
- 6) Ibid., SS. 122—123. [同上書、148~149頁]
- 7) Ibid., S. 123. [同上書、149頁]
- 8) Ibid. [同上書、150頁]
- 9) Ibid. [同上]
- 10) Ibid., S. 126. [同上書、156頁]
- 11) Ibid. [同上]
- 12) Ibid. [同上書、157~158頁]
- 13) Ibid., SS. 127—128. [同上書、158~161頁]
- 14) N. Luhmann, Rechtssoziologie, S. 139. [前掲邦訳書『法社会学』156頁]
- 15) Ibid., SS. 138—139. [同上]
- 16) N. Luhmann, "Evolution und Geschichte", Soziologische Aufklärung 2, Westdeutscher Verlag GmbH, Opladen, 1975, S. 152.
- 17) Ibid.
- 18) Ibid.
- 19) Ibid.

- 20) Ibid.
- 21) Ibid.
- 22) Ibid., SS. 152—153.
- 23) N. Luhmann, Rechtssoziologie, S. 135. [前掲邦訳書『法社会学』152頁], N. Luhmann, "Evolution und Geschichte", S. 152.
- 24) N. Luhmann, "Evolution und Geschichte", S. 152.

Ⅲ. 吉田民人の社会進化論

パーソンズにしる、ルーマンにしる、共に社会進化を捉える上での一つの準拠点は、社会システムと外部環境との間に、境界線を与えている「文化的要因」や「意味連関」の重要性を強調する点に存していた。文化的要因や意味連関とは、言わば社会システムの構造を「制御している情報」であるが、社会進化の問題を彼ら以上に、より明示的に情報論の視座から扱ったのは、吉田民人の提唱する「情報—資源処理パラダイム」であろう。

この理論の前提は、N. ウィナーの自然哲学にある。ウィナーは、自然の本源的要素を「物質・エネルギー」と物質・エネルギーの「時空的・量質的なパターン」の二つに求め、「時空的・量質的なパターン」を「情報」と名づけたのである。吉田も、このような二元論的な自然哲学に立ち、地球上の歴史に次のような進化段階を設定するのである。

無機的自然（天体史段階）

有機的自然（生物史段階）

人間的自然（社会史段階）

無機的な自然とは、「情報」によって制御されることのない自然で、物質それ自身が「即自的」に存在する進化段階である。有機的および人間的な自然

は、これに対し、「情報」によって制御される自然である。この進化段階に至り、システムは、自らの存在様式を情報の媒介により、「対自的」に表示・制御するようになるのである。有機的自然の段階にあっては「遺伝情報」が、人間的自然の段階にあっては「文化情報」が、その役割をそれぞれ担うこととなるのである。²⁾

しかし、これらの進化段階は、直線的に進行してきたものではない。新たな進化段階への転換には、「情報空間」と「物質空間」とにおいて、大局的な変容が生じているのである。すなわち、「無機的自然から有機的自然への飛躍」は、代謝物質たる「タンパク質」と、代謝のパターンをコントロールする「核酸」の登場によって、また「有機的自然から人間的な自然への飛躍」は、物質的生産（社会的物質代謝）を媒介する「道具」と、その生産パターンをコントロールする「シンボル（特に言語）」の登場によって、それぞれ実現されてきたのである。³⁾

このような進化段階の大枠を設定し、吉田は、次に、生命以後におけるシステムの進化段階をより具体的に図式化していくのである。

吉田によれば「生命以後の存在を成り立たせる資源空間（即自的契機）と情報空間（対自的契機）はそれぞれに進化してきたが、『情報による表示・制御』という視角を貫くかぎり、情報形態、情報創発（または情報試行・情報生成）、情報伝達、情報貯蔵、情報変換、そして情報選択⁴⁾などの各種情報現象の進化段階が、対自存在の存在様式にとって決定的な意義⁴⁾をもつとされているが、それらのなかでも特に、情報形態と情報選択のそれぞれの進化段階が、より一層重要な意義をもつものとされている。その理由は、この二つの情報現象が、他の現象を強く規定しているからである。

第一の情報形態は、「(1)生得情報（核酸、ホルモン、フェロモン、生得的リリーサー、無条件反射信号など、なお、生得情報はすべてシグナル情報である）、(2)習得的シグナル情報（習得的リリーサー、感覚・知覚・運動・動作信号など）、および(3)シンボル情報（心像、内言語、映像、外言語など、なおシンボル情報はすべて習得情報である⁵⁾）」へと進化し、また、第二の情

報選択も、「(1)自然選択（K. ポパーによればこれも試行錯誤＝問題解決である）、(2)事後主体選択（現実的な試行錯誤＝問題解決）、そして(3)事前主体選択（仮想的な試行錯誤＝問題解決⁶⁾）」へと進化してきたものである。

この二つのタイプの進化段階は、相互にクロスしうるものであるから、生命以後のシステムも、それに応じて多様な存在様式が考えられることになる。しかし、吉田は、次の二つの組み合わせが、「対自存在」であるシステムの基本的な進化の座標軸と考えているのである。すなわち、その一つは『生得情報の創発（emergence）・貯蔵と自然選択』とによって自己媒介される対自存在⁷⁾であり、他の一つは『習得情報（習得的シグナル情報とシンボル情報）の創発・貯蔵と主体選択』とによって自己媒介される対自存在⁷⁾である。ここに言う「生得情報、習得的シグナル情報、そしてシンボル情報の創発⁸⁾とは、それぞれ突然変異、運動暴発、そして自由発想⁸⁾のことである。

この二つの対自存在より成る座標軸の先端に、社会システムは位置しているのである。吉田は、社会システムをこのように位置づけ、次に、社会史段階における具体的な進化過程、すなわち、社会システムの構造変動過程を図式化していくのである。

吉田によれば、「社会システム」とは「複数の個人的・集団的な主体によるシンボル情報の処理を通じて直接・間接、また意識的・無意識的に制御された、物的・情動的・人的・関係的な資源の処理のシステム⁹⁾」である。この定義に従えば、社会システムの変動もしくは正負の進化——水準変動を伴う構造変動¹⁰⁾——とは、言わば「資源処理」の過程を制御する「情報処理」過程の変容と考えることができよう。

事実、吉田は、「構造制御情報」もしくは「構造情報」という概念を用いて、社会システムの自己変革過程を説明していくのである。ここに言う「社会システムの構造情報」とは、「社会システムに貯蔵されて、その情報—資源処理を直接的・間接的また意識的・無意識的に制御する、成文的・不文的また制定的・自生的な持続的・定型的シンボル情報の集合¹¹⁾」のことである。社会システムの「革新」とは、狭義には、この「構造制御情報の変動」であ

り、広義には、「構造制御情報の変動によって媒介された構造変動」のことである。¹²⁾

そして、この「構造情報の変動としての『革新』」が、有機体システムの「遺伝情報の変動としての『進化』」に対応する現象なのである。遺伝情報は、「突然変異と自然選択」によって変動し、「社会的構造情報」は「自由発想と主体選択」によって変動するという進化段階の相違はあるにせよ、両者は「試行と選択淘汰」に媒介される制御情報の変動というかぎりにおいて、まったく等価なのである。¹³⁾

ただし、構造情報の変動、すなわち「新旧の構造情報の交代（狭義の革新）」は、それだけで「システム構造そのものの交代（広義の革新）」を意味するものではない。「広義の革新」は、旧構造情報の制御機能が失われ、それにかわって、新構造情報の制御機能が発揮されて、初めて完結するのである。¹⁴⁾そして、このような革新が、社会システムの基本構造、すなわち、社会システムを構成する「情報ならびに資源の主体別・用役別・地域別のフローまたはストックの『基本的配分パターン』」において起これば、その効果が波及していき、他の副次的な構造領域に「構造的許容最適状態」を惹起し、第二、第三の派生的・改良的・調整的な「連続革新」を促していくことになるのである。¹⁵⁾

以上に素描したような過程が、吉田理論における社会システムの構造変動過程である。しかし、ここに示された過程は、資源論的な要因を軽視し、情報論的な要因のみをもって、理論化された社会変動モデルのように解されがちである。この点に関し、吉田は次のように述べ、そのような誤解を避けようとしている。すなわち、構造情報の「選択淘汰の基準」こそ、資源空間に「固有の法則性（構造情報の技術的可能性）」ならびに社会システムの「機能的要件」という「資源論的な要因」だからである。¹⁶⁾それゆえ、彼は、構造変動に限らず水準変動も含めて、社会変動とは、言わば「必要性（機能的要件）と主体性（自由発想と主体選択）と客観的可能性（資源空間に固有の法則性）の三位一体の結果」である、としているのである。¹⁷⁾

ただし、社会変動を「三位一体の結果」であると言ったところで、吉田の方法論上の認識関心が、「構造制御情報」という情報論的な要因に向けられている事実を否定することはできない。「構造情報」とは、社会的物質代謝を制御する、いわゆる「文化的要因」のことであり、また社会システムの変動とは、この物質代謝を制御する「文化的要因」の変容によって、惹起されるものなのである。このような点で、吉田理論もパーソンズ理論に近似していると結論できるのではなからうか。

注

- 1) 吉田民人「情報科学の構想」（吉田・加藤・竹内編『社会的コミュニケーション』所収）、培風館、1967年、18～19頁。
- 2) 吉田民人「社会体系の一般変動理論」（青井和夫編『理論社会学』所収）、東京大学出版会、1974年、190頁。
- 3) 吉田民人「社会科学における情報論的視座」（北川・香山・吉田編『情報社会科学への視座』所収）、学研、1971年、135～136頁。
- 4) 吉田民人「ある社会学徒の原認識」（吉田民人編『社会学』所収）、日本評論社、1980年、11～12頁。
- 5) 同上書、12頁。
- 6) 同上。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 吉田民人「社会体系の一般変動理論」191頁。
- 10) 「水準変動」「構造変動」という概念については、富永健一「社会変動の基礎理論」（安田・塩原・富永・吉田編『社会変動』所収）、東洋経済新報社、1981年、3～4頁。
- 11) 吉田民人「社会体系の一般変動理論」224頁。
- 12) 同上書、226頁。
- 13) 同上書、226～227頁。

- 14) 同上書、233頁。
- 15) 同上書、234頁。
- 16) 同上。
- 17) 同上書、235頁。

Ⅳ. K. E. ボールディングの社会進化論

社会進化における「文化的要因」の重視は、ボールディング理論にも見られる。しかし、ここで彼の理論を取り上げた理由は、それに尽きるものではない。むしろ、それを扱う理由は、彼の科学論の特異性や社会動学の具体性にあるとも言えるのである。

そこで、ここでは、まず、ボールディングの「科学論」を簡単に整理し、その後、社会システムの進化理論を見ていくことにしたい。

ボールディングによれば、「科学」は、今日、二つの重要な困難に直面している、という。第一の困難とは「ハイゼンベルグ原理の一般化」ともいうべきものである。それは、ある対象に関する知識を得ようとして、対象に働きかければ、知識を得ようとしていた対象そのもののあり方を変えてしまうという現象である。社会科学では、このハイゼンベルグ原理が、特に大きな力を揮っており、その意味でも「社会科学の知識が、社会システム自体の本質的部分」なのである。それゆえ、「研究しても変化しないような世界を研究するという意味の客観性」は、まったく意味のないものなのである。¹⁾

第二の困難は、科学の発展により、「科学はもう世界を研究するだけでなく、自分の研究する世界を創造する」段階に至ったということである。このことは、自然科学の領域において、明白な事実となっている。たとえば、物理学は、約60億年後の今日、地球上で諸元素の進化を起こさせており、また

生物学は、進化過程に干渉し、そのコースを変更することによって、新たな対象世界を創造しているのである。自然科学において、このような状況が現出しているのであるから、社会科学におけるそれは、より一層明白な事実なのである。²⁾たとえば、「私たちが本当に知り得ることの大部分は、私たち自身が創造しているものである」という命題や、「社会システムにおける予測は、この予測が的中するようなシステムを意識的に創造することによってのみ達成される」という命題の存在が、それを物語っているのである。³⁾

科学が「不変の世界」を研究対象とし得るなら、これらの困難は、けっして生じなかったであろう。しかし、事実として、科学は、自らの働きかけによって変化する世界を扱い、ついに、自らの知っているものを、創造する段階に至ったのである。ここまで来れば、もはや「没価値的科学的観念」は、まったくナンセンスなものになってしまうのである。科学は、いまや、倫理的・道徳的課題に取り組みざるを得ないところまで進んできた、というのである。⁴⁾

このような「科学論」を背景として、ボールディングは、社会システムの進化・動学の理論を組み立てていくのである。

ボールディング理論の大枠は、まず、地球上の歴史に進化段階を設定するところから始まる。ここに言う「進化」とは、「空間・時間の中の宇宙の構造中に見てとることのできるあるパターン」である。⁵⁾地球上の歴史にはこの進化パターンが三つ見いだされる、という。その三大パターンとは、「物理的進化」「生物進化」「社会進化」である。⁶⁾

これら三つの進化パターンの設定は、吉田理論におけるそれと、ほぼ同じである。つまり、吉田が「情報現象」の発展に着目して、進化段階を設定したように、ボールディングも、「遺伝子構造」もしくは「遺伝子型」という情報現象に着目して、それを行なっているのである。

生命以後に限って、進化パターンの変容を見るならば、「生物進化」の段階では、時として変異による修正を受けることもあるが、情報伝達の基本は、遺伝子構造の「単純な複製」である。これに対し、「社会進化」の段階

では、「精神圏」の極度に複雑な過程が、情報伝達の基本となっている。この複雑さは、「知識構造」だけでなく、それによって創り出された「表現型」が、新たな作物の生産過程へ介入するところから生じてくるものである。ここに言う「精神圏」とは、「あらゆる社会的構成の遺伝子構造である知識と価値のストック」のことである。⁸⁾もちろん、両進化段階における作物の生産過程は、いずれも「遺伝子型」による「表現型」の創造という点で、類似しているが、そこには、それぞれ「二性的」と「多性的」という遺伝子構造の大きな違いがあるのである。⁹⁾

いずれにせよ、多性的な遺伝子構造をもつ社会システムは、これら三大進化パターンの中で最後に位置づけられるのである。この位置づけを基礎として、ボールディングは、次に、社会進化の具体的な過程を素描していくのである。

社会の進化とは、社会システムの「遺伝子構造」である「精神圏」の内容によって方向づけられるもの、とされている。このような考え方は、「文化的要因」や「文化情報」の重要性に着目する他の理論にも見られたが、ボールディングの場合、その具体性において他を凌いでいるように思われる。

以下、「精神圏」の中でも、「知識」、「役割創造の関係」、「宗教」および「倫理・道徳」の四つを見ていくことにしたい。

まず第一の人類の「知識」は、ボールディング理論によれば、民間知識から文学的・思弁的知識、科学的知識へと進化してきたものである。この知識の進化と対応して、人類の生活空間も、量的・質的に拡大・向上してきた、というのである。すなわち、旧石器・新石器時代から文明時代、文明以降へと人類のニッチ（生態的地位）は拡大してきたのである。知識の進化が、ニッチ拡大に貢献した理由は、知識の進化それ自体が、知識の累積的増大を實現したからである。それゆえ、ボールディングは、知識を「進化の主体」とまで呼んでいるのである。¹⁰⁾

もちろん、「エネルギー」と「素材」の制約により、知識による再現物化は、制限されることとなるが、そのことによって、エネルギーと素材が、「進化の主体」になることはない。なぜなら、これらは、「制約要因」では

あっても、「創造要因」ではあり得ないからである。この種の考え方は、文化的要因の「高い情報度」と「低いエネルギー度」に着目したパーソンズの理論と、ほとんど同じであろう。¹²⁾

「知識」に加え社会システムの「精神圏」には、社会的組織や役割構造のあり方を、表示・制御する遺伝的コードの集合体も含まれている。それが第二の「役割を創造する関係」である。それは「脅迫関係」「交換関係」「統合関係（『愛』）」という三つの主要類型からなる。

第一の「脅迫関係」とは、「AがBに向って、『君は、僕の欲することを行なえ（つまり、或る役割を果せ）。そうでなければ、僕は、君の欲しないことを行なうであろう。』と言う時に発生する」もので、「脅迫システム」とも呼ばれるものである。

第二の「交換関係」とは、「AがBに向って、『君が、僕の欲することを行なえば、僕は、君の欲することを行なうであろう。』と言う時に発生する」もので、「交換システム」とも呼ばれる。

第三の「統合関係」とは、AがBに向って、『君と僕との間柄だから、君は或ることを行なうべきだ。』という時に発生するもので、「統合システム」とも呼ばれるものである。¹³⁾

これらの関係が、相互に混交した形で、現実社会の役割構造が成立してくるわけであるが、これらの関係は、さらに人類史という時間軸の上に並べて、人類史における役割構造の変遷としても捉えられるのである。すなわち、人類史を「脅迫—交換—統合の推移」として照射し直すことができるのである。¹⁴⁾

過去、「脅迫システム」は、奴隷制度と古代文明を生み出し、役割構造の中心的な類型を成していた。しかし、産業革命期の到来と共に、役割構造の中心は、「交換システム」へと移行していったのである。「交換は、脅迫より遙かに豊かな進化的ポテンシャルを含む極めて強力な組織力」をもったものであったがゆえに、社会システムの拡大再編成には、この関係が、必要不可欠なものとなったのである。¹⁵⁾しかし、また、現在、この「交換システム」

も一つの限界に達しつつあるのである。その限界とは、社会システム内に疎外を生じさせ、コミュニティ意識の欠落を招いていることである。¹⁶⁾

「現存の限界が不断に超越される過程」が「進化」であるとするならば、¹⁷⁾この限界も乗り越えなければならないということになる。その乗り越えは、まだ進化的ポテンシャルを十分に内蔵している「統合システム」への漸進的移行によって、実現されるのではないかと考えられている。もちろん、「統合システム」にも部分的な限界はある、¹⁸⁾としており、統合によせるボールディングの期待は、否定できないようである。そのことは、次の記述からも明らかであろう。

「個々人にとっては統合関係の方が交換よりもはるかに満足すべきものである。愛のために物事を行なうことは、常に、金のために物事を行なうよりも道徳的かつ進歩的であるように思われる。¹⁹⁾」

また、第三にボールディングは、「宗教」をも、精神圏を構成する重要な要素としている。

人類史上、「宗教」は、「人間および社会の進化という大分類門で、或る役割を演じてきた」。たとえば、墳墓、寺院、祭具といった物的作物や修道院、尼僧団の階序的位階制といった社会組織、さらには、司祭、僧、伝道者などの専門的職業などは、すべて宗教という「人類のシンボル体系」に深く埋め込まれている「イメージ」によって、²⁰⁾現物化されてきたものなのである。

また「宗教」は、それが奉ぜられる集団の「非常に重要な団結の絆」ともなってきた。その理由は、集団（特に国家）に欠けていた「統合」の要素を、宗教が提供し得たからである。しかしまた、逆に、宗教は、それが集団の団結を強化し得たがゆえに、パラドクシカルな状況をも現出してきたのである。すなわち、宗教は、紛争の原因をも創り出してきたのである。「大宗教のどれ一つとして、信奉者間の戦いを阻止できたものは無い²¹⁾」という歴史的事実からも、このことは理解できよう。

それでは、「宗教」は、今後その勢力を弱めていくことになるのであろうか。ボールディングによれば、それは今後も人類のシンボル体系の基本的部

分になっていく、とされている。ただ、宗教の提供する情報の内容は、社会の進化とともに変容していくのではないかと考えられている。それは、社会システムの役割構造が、統合システムへと推移しているように、宗教も「地獄の恐怖の宗教」から「天国の希望を取り引きする宗教」を経て、「恩寵と愛の宗教」へと進化していくことなのである。²²⁾

この「宗教」と同様に、精神圏に大きな位置を占めるものとして、第四の「倫理」もしくは「道徳」がある。

倫理の観念と実践は、「社会進化の不可分の構成要素」であり、その生存・絶滅は、社会の「全般的生態システム」との関連において左右されるものである。²³⁾たとえば、老人に対する扱いを例にとってみよう。「生存線ぎりぎりにいる社会」は、老人が生産的でなくなると、社会存続のために、彼らを放棄することとなる。これに対し、「環境がもっと穏やかで剰余がもっと大きい社会」では、老人は長期的な尊敬を受けることとなる。²⁴⁾それゆえ、現存する「倫理的原理」と「社会的道徳観の体系」は、それがいかなる時代のいかなる社会の所有物であったとしても、常に「社会の進化過程の結果」の産物なのである。²⁵⁾

宗教が、ある集団の内部統一に寄与してきたように、倫理・道徳も集団の内的調和に貢献してきたと言えよう。しかし、この道徳も、外に向っては、それ自身の規範を否定するというパラドックスに直面してきたのである。すなわち、「殺人、窃盗、詐欺、嘘言等々を内では強く戒めながら、同じことを外に向かつては奨励」してきたのである。現実のこのような「内部道徳」と「外部道徳」との緊張が、全人類史を通して、社会システムの拡大の必要性を齎してきたが、「今や人類の歴史において、内部倫理と外部倫理の融合が達成される段階に近づきつつある²⁶⁾」というのである。

社会システムの精神圏は、以上のような様々な要因の相互作用によって成るものであり、それは、社会システム自身の構造と機能を、表示・制御していく「創造要因」なのである。その意味で、ボールディング理論にも、ここに見てきた諸理論と相通ずる基本的な考え方が存在しているのである。

注

- 1) K. E. ボールディング『科学としての経済学』清水幾太郎訳、日本経済新聞社、1977年、147～148頁。
- 2) 同上書、148頁。
- 3) 同上。
- 4) 同上書、149～150頁。
- 5) K. E. Boulding, *Ecodynamics*, Sage Publications, Inc., California, 1978, p. 9. [邦訳書『地球社会はどこへ行く(上)』長尾史郎訳、講談社、1980年、24頁]
- 6) Ibid., p. 10. [同上]
- 7) Ibid., p. 219. [同上書(下)、71～72頁]
- 8) Ibid. [同上書(下)、71頁]
- 9) Ibid., p. 32. [同上書(上)、68頁]
- 10) Ibid., pp. 134—135. [同上書(上)、267～270頁]
- 11) Ibid., pp. 136—139. [同上書(上)、272～277頁]
- 12) Ibid., pp. 224—225. [同上書(下)、82～84頁]
- 13) K. E. ボールディング『科学としての経済学』17～19頁。
- 14) K. E. Boulding, op. cit., p. 277. [前掲邦訳書『地球社会はどこへ行く(下)』185～187頁]
- 15) K. E. ボールディング『科学としての経済学』18頁。
- 16) K. E. Boulding, op. cit., p. 277, p. 303. [前掲邦訳書『地球社会はどこへ行く(下)』186頁、237頁]
- 17) Ibid., p. 304. [同上書(下)、241頁]
- 18) Ibid. [同上書(下)、239頁]
- 19) K. E. ボールディング『愛と恐怖の経済』公文俊平訳、佑学社、1974年、227頁。
- 20) K. E. Boulding, op. cit., p. 307. [前掲邦訳書『地球社会はどこへ行く(下)』243～244頁]
- 21) Ibid., p. 308. [同上書(下)、245頁]
- 22) Ibid., p. 338. [同上書(下)、308頁]
- 23) Ibid., p. 312. [同上書(下)、254～255頁]

- 24) Ibid., p. 319. [同上書(下)、269頁]
- 25) Ibid., p. 318. [同上書(下)、267頁]
- 26) Ibid., pp. 319—320. [同上書(下)、270頁]

結 び

以上、四つのシステム論的な社会進化論を整理してきたが、そこには、ある共通の認識パターンがあったように思われる。その認識パターンとは、システムのあり方を、表示・制御する「文化的な情報」、すなわち「文化的要因」、「意味連関」、「文化情報」、「精神圏」などに着目し、それが社会システムの進化に与える影響を高く評価していることである。もちろん、このような認識パターンは、既に古典的な社会進化論にも見られたものである。ただ、古典的な進化論の場合、それが「生物学的アナロジー」と結びついていたために、「社会遺伝」の特異性や社会に対する個々人の「主体性」が、過少視される結果となってしまったのである。

これに対し、現代の進化論は、システム論的・情報論的観点から、古典的アナロジーを止揚し、より高い次元から「物理的・生物的・社会的な対象世界」を照射し、それら対象世界における「同質性」と「異質性」を描き出しているのである。たとえば、生物界と社会における進化現象の同質性は、「遺伝的構造」による「システム構造」の表示、および「システム構造」から「遺伝子構造」へのフィードバックなどとされ、またその異質性は、社会的世界における「主体性」などとされているのである。

ただし、ここで注意すべきことは、生物界と社会の異質性が、「主体性の存否」にあると解されてはならないことである。それは、むしろ「程度」の違いとして解すべきであろう。何故なら、如何に「主体的な発想」と「主体

的な選択」を、システムが行なおうとも、それは、その「主体性」をとりまく状況によって最終的な選択・淘汰を受けることになるからである。しかし、最近のいくつかの社会進化論は、「自然淘汰」思想の私試に力を置いているがために、状況からの淘汰作用についてはあまり触れていないようである。ただ、ボールディングについて言えば、この種の考え方は、より明示的に展開されていると言えるのではなからうか。

彼は、社会システムを「生態システム」の中に含まれるものとし、「社会的作物」の生成衰滅を、生態学の諸概念をもって説明しているのである。その代表的な概念として、「生態的地位（ニッチ）」というものがある。「ニッチ」とは、ある作物の生存価を決める時間的・空間的状况であり、いわゆる「自然淘汰」を説明する概念なのである。生態システムは、常に遷移を繰り返しているが、この生態的遷移の中で、様々なニッチの変動が生じ、そのニッチの変動が、作物の生成衰滅を決めていく、というのが、ボールディング²⁾の見方なのである。

いずれにせよ、本稿で見えてきた社会進化論は、現代という変動の時代が生み出してきた「知的作物」なのである。つまり、現代にニッチを得た情報の集合体なのである。これらの情報集合体は、過去の理論をその内にかかえ込み、さらにそれを超えようとするものなのである。すなわち、現代の理論は「社会ダーウィニズム」においても既に捉えられていた「社会遺伝」もしくは「精神遺伝」という現象に着目し、その意義を新たな視角から照らし直し、過去の理論の犯かしたあやまちを克服しようとしているのである。その意味で、「進化」は社会システムの進化を説明する理論自体に生じてきた現象とも言えるのではなからうか。

本稿では、最近の社会進化論の中でも、特にシステム論的な進化論のみを扱うこととなったが、この他、ホワイト、チャイルド、レンスキ、サーリンズ＝サービスなどの「普遍進化論」やスチュアートなどの「多系進化論」も、注目に値する最近の理論である。また機会を改め、これらの研究も整理していくことにしたい。

注

- 1) 富永健一「社会変動の基礎理論」(安田・塩原・富永・吉田編『社会変動』所収)、東洋経済新報社、1981年、23～26頁。
- 2) K. E. Boulding, *Ecodynamics*, Sage Publications, Inc., California, 1978, pp. 53—98. [邦訳書『地球社会はどこへ行く(上)』長尾史郎訳、講談社、1980年、108～197頁]
- 3) 友枝敏雄「社会進化論」(安田・塩原・富永・吉田編『社会変動』所収)、東洋経済新報社、1981年、142～143頁。

本稿執筆にあたっては、永安幸正早大教授から有益なコメントを戴き、またルーマンの解釈にあたっては、モラロジー研究所研究員の青山治城氏の成果を援用させて頂いた。なお、独文の翻訳は、同研究所研究生の中野千秋氏の協力を戴いた。記してここに謝意を表したい。

A New Trend in Social Evolution Theory —Focusing on the Approach of System Theory—

Iwao Taka

Social Darwinism was willingly accepted by European societies which had deeply supported the idea of laissez-faire in the middle of the nineteenth century. On the one hand, it strongly influenced the direction taken by those societies. On the other hand, however, it generated several social problems. For example, it justified war as a means for progress, allowed discrimination against the lower classes, from which would come the social condition for accepting Marxism, and so forth.

Because of this, the social Darwinism as a theory of social evolution gradually lost the power to provide direction to those societies. Nevertheless, this historical fact did not mean that there were no theories of social evolution available. Modern societies, now faced with new social changes — symbolized by the information revolution — have begun to produce new theories and to be influenced by them.

In this paper, the author introduces the new trend in social evolution theory, and elaborates typical theories: T. Parson's, N. Luhmann's, T. Yoshida's, and K.E. Boulding's. The purpose of this paper is to point out the similarities of thought between them as well as points of difference from classical theory.